

「大坂の史跡を訪ねて」連載22回目

～阿倍野墓地 その1～

オサタニ ヨシハル
長谷 吉治

▶ 連載21回目の長柄墓地に続き、南の阿倍野墓地に眠る偉人を2回に分けてご紹介します。

阿倍野墓地(大阪市設南霊園) 阿倍野区阿倍野筋4丁目

▶ 2003年3月の大坂史蹟探訪イベントVol. 4では、イベントコースに予定していたのですが、時間切れのため、まわれなかった場所でもあります。参加していただいた皆さん、すみませんでした。イベント用のテキストに掲載した内容に、加味してご紹介します。阿倍野墓地は、6.9ヘクタールもの広大な墓地で、1万3千もの墓碑があります。

1

くさ なぎ さん しゅう

日柳三舟

▶ 日柳三舟は、高松の勤王家である日柳燕石の長男にあたります。日柳燕石は、幕末期に一時高杉晋作を匿った事があり、高松藩が晋作の捕縛にかかった際、燕石は身替わりで縛につき、4年間高松の獄舎に投獄されました。日柳三舟は、名を政愨といいます。明治維新後、大阪に来て学務課長、師範学校長を務めます。辞官後、浪華文会を起し、教科書出版に大きな功績を残しました。教科書の原型は三舟に始まるといわれます。



大阪府師範学校古写真



父 日柳燕石像(香川県)

<大阪師範学校について>

大阪教育大学の前身であり、明治7年(1874)5月、東本願寺掛所内に教員傅習所として創設されました。明治10年(1877)から明治34年(1901)までは、中之島の久留米藩蔵屋敷跡に校舎を設置していました。この間、女子師範学科などが併設されるなど、次々と新たな校舎が増築されています。

2 長州藩殉難48士

- ▶ 元治元年(1864)7月18日「蛤御門の変」が起こり、敗戦した長州藩 宍戸久之進ら62人の兵士たちは、伏見から舟で淀川を下りますが、大坂の桜宮付近で高松藩に捕えられます。千日前刑場の獄舎に入れられ、幕府による極めて過酷な扱いを受けます。半年以内に刑死者6人、牢死者39人を数え、一人ずつ毒殺した、という説もあるようです。彼ら45人の死骸は、犬猫同様に刑場の片隅に無造作に埋められたそうです。明治期になると、賊として扱われた長州兵士の立場は逆転、勤王の志士として評価されます。明治2年夏、夕陽丘にある大江神社の一角に招魂社を建て慰霊、顕彰を行いました。同じく蛤御門の変で、敗走中に尼崎で捕えられ自刃した山本文之進と、薩摩藩御用船を焼き討ちした事件で、南御堂前にて切腹した水井精一と山本誠一郎の3名が、千日前で亡くなった45人の中に加えられ、計48名が祀られました。その後、千日前に眠っていた45名を掘り起こし、前記の3名を加え、この阿倍野墓地に改葬されました。夕陽丘の方は、「舊山口藩殉難諸士招魂之碑」という大きな碑が、明治23年11月に建立され、48名一人一人の名が五段にわたり刻まれています。



阿倍野墓地にある「長州藩殉難48士」の墓

夕陽丘 大江護国神社境内にある「舊山口藩殉難諸士招魂之碑」



48名が銘記されている

「東本願寺門前 長州藩士切腹事件について」

元治元年(1864)2月、周防上関に駐屯していた義勇隊士が、近くの別府浦に碇泊中だった薩摩藩御用商人の船を襲撃し焼沈させます。その上、船主の大谷仲之進を殺害するという事件が起きます。文久3年12月24日にも、関門海峡で、幕府から借用中の長崎丸を運行中の薩摩藩が、長州藩に焼き討ちされるという事件を起こし、謝罪したばかりでした。長州藩は、犯人を出来るだけ、ひと目のつくところで派手に処分をし、世間への同情を長州藩に集めようと考えます。しかし、犯人が見つからないため、藩のために死んでくれる死士を募ります。名乗りを挙げたのが上関の義勇隊士 水井精一でした。しかし、一人では具合が悪いということで、同隊士の山本誠一郎に白羽の矢があたりました。京都で行う予定の切腹が大坂に変更となり、ここ南御堂の門前で行うことになりました。大谷仲之進(前記の船主)の首を傍らに置き、二人の切腹が行われました。水井精一は、自ら名乗りを挙げただけに潔い切腹だったそうです。しかし、白羽の矢をあてられた山本誠一郎は、生への執着があり、ぐずぐずしているところを執行人だった野村和作に斬り殺され、自殺に見せかけたそうです。



東本願寺難波別院(南御堂)

3 五代友厚

▶ 五代友厚は、天保6年(1835)12月26日、鹿児島城下城ヶ谷に生まれます(坂本龍馬と同じ年に生まれる)。名は才助といました。藩医だった父の五代秀堯が、藩主の島津斉彬から世界地図と地球儀の作成を命じられていたために、才助は14歳でこれらを目にします。特に、海軍国イギリスと日本の地形が似ていることに驚きます。後に才助は、長崎海軍伝習所で航海術、砲術、測量、数学を学びます。五代は、坂本龍馬の海援隊と紀州藩が争った「いろは丸事件」で両者の仲介を務めています。慶応元年(1865)、30歳の時、欧州を視察。帰国後、新政府の参与、外国官権判事などを歴任しますが、不満を感じて下野し大阪に住みます。大阪で多くの事業を起こし、大阪商法会議所を設立。初代会頭に就任します。墓の前に「五代友厚顕彰碑」が建てられています。碑文には次のように記載されています。

『五代友厚氏は鹿児島島の産。長崎の海軍伝習所に学び、上海に遣いした後欧州に渡り、諸国の新知識に接して帰朝、維新政府の参与に任ぜられ、外国事務局判事を歴任。外交内政、広く貢献した。明治二年官を辞して大阪に居を定め、各地鉱山の開発、藍の精製に始まり金銀分析所、活版所、貿易会社、鉄道会社、商船会社等多くの事業を興した。また社会公共にあっても、明治十一年大阪商法会議所を設立。初代会頭として商工業界を指導したほか、造幣寮、米商会所、株式取引所、大阪商業講習所の創立に尽力した。明治十八年九月二十五日、惜しくも五十才にして病没したが、卓越した先見性と豪放、高潔の人柄をもって、よく大阪経済を衰微の極から救い、後の発展の礎を築いた功績は不滅の光彩に輝く。ここに氏の生誕百五十年 没後百年を記念し、その偉業を顕彰する』

昭和六十二年十二月 大阪商工会議所建之
大阪大学名誉教授 日本学士会員 宮本久次 撰
日展書家 前田桃園 書』

中央区にある五代友厚像



五代友厚顕彰碑